

第一〇二回日本学士院受賞者略歴

恩賜 日本学士院賞 受賞者 吉川 一義



略歴	生年	専攻学 科目
	昭和二十三年	フランス文学
	昭和四五年	五月
	同 四七年	三月
	同 五二年	一月
	同 五二年	四月
	同 五三年	四月
	同 五六年	四月
	同 六三年	四月
	平成 五年	四月
	同 一八年	四月
	同 二四年	四月
		東京大学文学部仏語仏文学専門課程卒業
		東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了
		博士(フランス文学) パリ・ソルボンヌ大学
		東京大学文学部助手
		東京女子大学文理学部講師
		東京女子大学文理学部助教授
		東京都立大学人文学部助教授
		東京都立大学人文学部教授
		京都大学大学院文学研究科教授
		京都大学名誉教授

博士（フランス文学） 吉川一義氏の

Proust et l'art pictural（『プルーストと絵

画芸術』）に対する授賞審査要旨

吉川一義氏は、フランス二〇世紀文学を代表する小説家マルセル・プルーストの研究者として国際的に令名が高いが、二〇年ほど前から、絵画がプルーストの作品においてきわめて重要な役割を果たしていることに着目して精力的な研究を進め、その成果を日仏両語で発表してきた。本書（*Proust et l'art pictural*, Paris, Honoré Champion, 2010）は、著者が日本語で公刊した二冊の単著（『プルースト美術館』筑摩書房、一九九八年九月、及び『プルーストと絵画』岩波書店、二〇〇八年二月）を総合して構成を組みかえ、必要な修正を施したものであり、著者の研究の到達点を示すものである。日本語の前二著作の評価は日本国内にとどまっていたが、本書はフランスの学界からも高い評価を受け、アカデミー・フランセーズ（フランス学士院）が、吉川氏のプルースト研究に対する長年の貢献に報いるために、学術大賞フランス語フランス文学顕揚賞を授与するきっかけとなった。

本書は、五部二三章から構成されている。プルースト畢生の大作『失われた時を求めて』は多彩な絵画の宝庫であり、ここではヨーロッパ絵画の数々の傑作——たとえば、フェルメールの『デルフトの眺望』——が言及あるいは暗示され、叙述と描写に精彩と奥行きを与えるばかりでなく、物語全体の構成と進行、さらには作者の芸術観の表明において大きな役割を果たしているが、最初の三部は小説で言及ないし暗示される画家及びその作品と著者プルーストの関係を論ずる。第一部はイタリア絵画（カルパッチョ、ジョット、レオナルド・ダ・ヴィンチ、マンテーニャ）、第二部はフランドル・オランダ絵画及びスペイン絵画（フェルメール、レンブラント、ハルス、エル・グレコ等）、第三部はフランス絵画（モネ、ギュスターヴ・モロー、アングル、ドラクロワ、コロー、社交界を描いた画家たちと絵画コレクター等）に当てられている。第四部は、『失われた時を求めて』という小説のなかで絵画がいかなる役割を果たし、いかなるメッセージを担っているかという問題を考察する。最後の第五部は、登場人物の一人であり、作品中で重要な役割を果たす架空の画家エルスチールとその画業を取り上げ、エルスチールの人物像がどのような発想源をもとに造形されたか、また彼の描いたとされる作品群について、小説の言語によって提示される架空の画面がどのように構成されたのか、またそれぞれの絵は小説でいかなる役割

を果たしているかといった問題を考究する。

本書はモノグラフィの集大成であり、それぞれの論文は個別の問題に取り組み、具体的な成果を挙げているが、全体としてはとりわけ、(1) 作品中で言及される画家とその作品の同定、(2) 実在の画家と絵画は作品中でさまざまな仕方提示されているが、その提示の形態とそれが作品の構成とメッセージにとって持つ意味、(3) 芸術に対する偶像崇拜的態度と真の芸術創造との関係、(4) エルステールとその画業が作品において果たす役割について、以下のように、実証に裏付けられた数々の創見が提起されている。

(1) 小説の中に画家と絵画が導入されるのは、それ自体を論じるためではなく、作品の要素として小説の目標に奉仕するためである。そのため問題となる絵画はしばしば暗示されるにとどまり、場合によっては、その正体が隠蔽されることもある。吉川氏は、作品中で取り上げられるそれぞれの画家の作品の原画または複製を、作者ブルーストが、いつどのような状況で見ることができたかを確かめるため、一方では、彼が訪れた各地の美術館とパリの画廊、彼の見ることできた展覧会と私的コレクション、彼が参照した画集・専門書・論文を、また他方では、彼の手紙、小説のメモや草稿を徹底的に調査した。そしてそれを通じて多くの作品を同定し、それぞれの絵画がどのように小説のなかに組み込まれたか、またそれぞれ

の画家と作品が小説のなかでいかなる機能を果たしているかを明らかにした。

(2) 作品中に提示される絵画は、それとして名指され、精細な描写が行われることもあれば、画家の名前だけが挙げられて作品は暗示されるにとどまることもあり、さらには特定の作品が背後にあるにもかかわらず、その身元が意図的に隠されることもある。そのような提示の仕方の違いに着目することによって、たとえばモネの作品が小説のいくつかの場面の描写の背後にあり、小説を支える芸術理念の重要な構成要素になっていることが解明された。

(3) ブルースト自身、大の芸術愛好家であり、偶像崇拜的ときえいえる愛を絵画に捧げる面を持っていた。彼は、その側面を作品の登場人物の一人、裕福なユダヤ人好事家シャルル・スワンに投影し、スワンの嗜好を描くことを通じて、ヨーロッパ名画の豊かな絵巻を作品中に現出させた。またそれと同時に、小説の語り手であり主人公である「私」が芸術的に成長を遂げるにつれてスワンに向けた批判的なまなざしも詳細に書きこんでいる。このような二重性こそが、『失われた時を求めて』という小説を、真の芸術創造の秘密を開示する作品たらしめていることを吉川氏は浮き彫りにした。

(4) エルステールについては、その架空画面のいくつかの背後にマネ、ターナー、ホイットスラーが潜んでいることが突き止められ

た。さらに彼の美学を集約するものと位置づけられる海洋画『カルクチュイ港』のヴィジョンとスタイルを精密に分析することを通じて、エルスチールの美学が作家ブルーストの美学の表明にほかならないことを説得的に示した。

本書に惜しむべき点があるとするれば、図版が質量ともに十分でなく、取り上げられた絵画の特徴と問題点がよく読みとれないことが挙げられる。しかしこれは技術と経費の制約に由来する本の制作上の問題であり、研究の価値をいささかもおとしめるものではない。

吉川氏の研究は、一方では、文献・画像両面での資料の博搜、他方では、明快で透徹した問題設定によって卓越した成果を挙げ、世界のブルースト研究に画期的な寄与をなしたばかりでなく、文学と絵画の相互交渉についても斬新な展望を開いた。以上により、吉川氏の研究は日本学士院賞授賞に値する。